

平成30年度

# 近畿大学附属小学校 学校評価 総括



## 近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

## 1. 平成30年度 学校方針

### (1) 学園の建学精神

「実学教育」と「人格の陶冶」

### (2) 学園の教育の目的

人に愛される人 信頼される人 尊敬される人 を育成することにある

### (3) 本校の教育目標

知・徳・体の健全な発達を図り、「一隅を照らす人」を育てる

### (4) 目指す小学校像

- ① 愛され、信頼され、尊敬される小学校
- ② 教職員が誇りを持てる小学校（教員を目指す人たちが憧れる職場）
- ③ 社会の変化に敏感で、絶えず新しい挑戦をする学校

### (5) 教職員に求められること

- ① 授業の質を向上する
- ② 教職員個々のスキルアップ
- ③ 仕事の効率を向上する
- ④ 常に改善を意識し、失敗を恐れない
- ⑤ 良好な職場風土の醸成

### (6) 本年度の重点目標

- ① 児童募集活動の充実
- ② 本校独自の幼小一貫教育
- ③ 附属中高との連携の強化
- ④ 教員研修の充実
- ⑤ 児童・保護者への組織的対応
- ⑥ 高い進路保障と柔軟な進路選択
- ⑦ ICT教育の推進
- ⑧ 学校行事及び宿泊行事の充実
- ⑨ ビオトープの活用
- ⑩ 本校独自の英語教育
- ⑪ 保教会活動の検討

## 2. 近畿大学附属小学校 学校評価について

### (1) 学校評価の目的

具体的な視点で重点化した年度目標や具体策の達成状況を把握し、評価サイクルの繰り返しによって、学校運営を改善し、教育の質の向上を図るとともに、学校関係者評価の実施や評価結果の公表等の取り組みを含めた、年間を通じた評価活動を実施することにより、教育内容の充実を図る。

### (2) 学校評価の種類

自己評価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケート・保教会運営委員アンケートによる結果

学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園教頭、近友会会長、保教会会長、校長、教頭により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。

### (3) 評価基準

S：目標を上回って達成した（4.5～5.0） A：目標どおり達成した（3.8～4.4）

B：取り組んだが達成できなかった（3.1～3.7）

C：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった（3.0以下）

### 3. 自己評価について

#### (1) 教職員による評価

<p>1. 学校経営の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <p>○ 開かれた、信頼される学校づくりを進めるため、学校として、あるいは、学校やクラスとして抱えている課題に対し、組織的な学校運営を行う。</p> <p>○ 学校行事および宿泊行事の充実に向けて、本校の教育目標に沿った形で改善を図る。</p> <p>○ 教育活動を広く公開、発信していくことで、在校生保護者との信頼関係づくりに努める一方、開かれた学校づくりを通して、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。</p> <p>○ 学校をあげていじめの未然防止に努め、いじめの早期発見と、組織的な事案対処を行う。</p>		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①組織運営	初期対応に重点を置き、教育相談室長、学年主事、学年主任と連携を深め組織的な対応を行う。学年会、学年主任会を有効に活用し、必要に応じて柔軟に話し合いの機会を持つ。「報告・連絡・相談」を組織的に行う。	A
②学校行事の運営	学舎・学習旅行は、今年度の実践を振り返り次年度への改善を図るとともに、系統性のある学舎・学習旅行を構築するために検討を進め、教員全体で共有できるようにする。	A
③情報の発信・児童募集活動	学校便りや学級通信、きんちゃんしょうちゃん日記等を通じて、家庭や入学希望者への情報発信と子育て支援を充実し、定員確保に向けた児童・園児募集活動を強化する。	A
④いじめ対策	いじめが起きにくい環境、いじめを許さない環境づくりに努め、事案に際し、迅速な組織対応を行い、必要に応じてアンケートや個人面談・保護者面談を実施し、校内研修を充実する。	A
結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点		
<p>① 学級での事案を学年主任・学年主事と共有し、組織だった対応をすることができた。連絡すべき人や場所がはっきりしており、事案が発生すれば相談しやすい環境が整っている。学年主事や教育相談室長が常に気を配り、細かく丁寧な指導・助言を行い、仕事をスムーズに行えるよう工夫している。</p> <p>学年団だけでなく、専科の教員やフロア担当の教員とも、情報の共有化や対応について連絡を密に取り合い、教員個々の資質の向上を目指していきたい。</p> <p>② 学舎・学習旅行の目的や意義、内容を共有する研修を行い、教員全体で、その系統性をより理解するための手立てを取ることができた。どの学年も、ねらいを明確にさせて様々な体験に取り組み、普段の学校生活では経験できないことを実施できている。今後も各学年の目的やねらいに応じて、新しい視点からの改善を進めていきたい。</p> <p>③ 開かれた学校づくりに向けての情報発信として、学級通信、専科からの通信、きんちゃんしょうちゃん日記等、充実した内容で、保護者から信頼を得ることができた。きんちゃんしょうちゃん日記では、児童募集にも効果があった。学級通信等の発行は、教員の負担を減らすため発行数の見直しを図った。保護者からの理解を得ることができた。</p> <p>少子化が急速に進む中、児童・園児への募集活動は、定員確保へ向けて全教職員が意識を高く持って、次年度以降も取り組んでいきたい。</p> <p>④ いじめ事案に対する組織対応の在り方について確立しつつあり、児童・保護者・担任にとっても安心できる環境が整いつつある。また、いじめに関する校内研修も適宜実施することができた。今後も、道徳発達検査「HUMAN」の活用も視野に入れながら、本校の「いじめ防止基本方針」に従って、いじめ対策を進めていきたい。</p>		
<p>2. 学習指導・研修の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <p>○ 附属幼稚園と連携を一層推進し、幼小のつながりをより明確にした、本校独自の幼小一貫教育を確立する。</p>		

- 問題解決学習を基盤にした授業をすすめ、ICT教育の推進やプログラミング教育の実践を図るとともに、子供たちが意欲的に学ぶことのできる学習環境を充実させる。
- 教員一人一人が本校で果たすべき役割を自覚できるよう、各種研修を充実させるとともに、指導力の向上を図る。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 幼小一貫教育の確立	新学習指導要領の実施を見据えた教科論の作成と研究授業の実践、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有、段差のない幼小接続カリキュラムの完成	B
② 学習環境の充実	タブレットを使った授業の実践とICT教育の充実、プログラミング教育の実践。幼小合同授業などの異学年交流授業の実践、各教科等の特性を活かした学習や発表の充実	A
③ 近小の教員としての教員研修	若手教員対象の基本研修と授業研究の実践。ICT研修などの教員研修、児童の特性や保護者の多様化に対応するための教員研修、西日本私小連研修など各種研修への参加と伝達研修の実施	A

結果と分析・次年度への改善点

- ① 各教科で研究授業を行い、教科論を完成させることができたのは、大きな成果である。日頃の具体的な指導を整理し、本校らしい教育活動を教科論に示すことができた。その教科論を基に、来年度は特に国語科・算数科・理科・社会科について、指導力のさらなる向上を図らねばならない。幼稚園との一貫教育については、今年度、幼稚園の研究保育に小学校として関わることができた。また、幼稚園との意見交換も密に行えた。具体的な一貫教育の姿について、いっそう話し合いを深めていきたい。
- ② 3年間のiPad導入計画を終え、新しい取り組みとして来年度の5・6年生での「個人持ちiPad導入を打ち出し、授業実践を重ねた。教員向け・保護者向けのICT公開授業を行い、校内での共有を図りつつ、保護者への理解を求める取り組みを行った。プログラミングについては、パソコンの授業だけで行うものではなく、各教科の中で行っていかねばならない。音楽科・図工科をはじめ、いくつかの教科で、その特性を生かした学習や発表の機会が持てた。
- ③ 今年度は、授業研究に伴う授業参観や研究協議会の場を多く持ち、他の教員の授業を参観する機会を増やすことができた。また、若手教員に対しては基本研修会を定期的実施できた。児童の特性や保護者の思いが多様化する中、より具体的な内容に踏み込んだ研修も行えた。来年度は特に国語科・算数科・理科・社会科についての指導力をさらに向上させるために、授業を参観する機会を学校内外でもっと増やせるようにしなければならない。

3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点

(1) 目標

- 規範意識を育成し、高めていくための具体的な目標を設定し、学校全体で徹底した指導を行う。
- 子供たち自らが諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。また、異年齢交流を深め、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる。
- 体育的行事を通して、安全な行動や規律ある集団行動を体得し、運動に親しむ態度を育てるとともに、体力の向上を図る。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 生活指導と安全	全教員による年間生活目標（挨拶、身だしなみ、登下校マナー）の徹底指導と愛校心の育成	B
② 児童活動	学級会の充実 実行委員会による集会等の企画・運営 たてわり活動や附属幼稚園との活動の実施	B
③ 保健衛生と体育	体力づくりプログラムの確立	B

結果と分析・次年度への改善点

- ① 年間目標を設定し、生活向上委員会、週番の活動などを通して、規範意識を高め、定着を図ることに努めた。火・水・土曜日など全学年一斉下校時の下校方法の見直しなど、全教員による継続した指導の徹底と家庭への啓発が必要である。
- ② 実行委員による集会や縦割り活動、附属幼稚園との活動が計画的に実施できた。日常の交流や児童の意識の高まりを感じられる面もある。学級会や児童会、委員会と連携し、児童会中心にさらなる改善の方法を探っていく必要がある。
- ③ 年間を通して、運動週間を設定し、児童の運動機会の増加、体力向上を図ることに努めた。また、運動タイムを実施し、怪我防止の対策を行った。安全を重視し、熱中症対策などを徹底して、体育行事を無事に終えることができた。運動内容についての検討、定着への工夫を行い、体育の学習、校内生活の在り方、冬季の感染症予防など家庭との連携を含めた対策について検討する必要がある。

#### 4. 進路指導・学習評価の重点

##### (1) 目 標

- 個々の学力推移を的確に把握し、進路に対する保護者の意向や子どもの思いを尊重しながら進路指導を進めていく。
- 何事にも元気に真面目に頑張る態度を身に付けさせ、附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける人物を育成していく。
- 進路追認を進めていくとともに、卒業生による進路学習を充実していく。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 適切な進路指導	個々の学習状況の把握に努め、必要に応じた支援の取り入れ 高学年における、各中学校の情報収集・共有化、進路指導の充実	A
② 進路保障(内部進学)	柔軟な進路選択と高い進路保障の一層の推進 特に、内部推薦制度の新たな選考基準での運用	A
③ 保健衛生と体育	同窓会と連携しての、卒業生による進路学習の充実	A

#### 結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 個々の学習状況の把握に努め、必要に応じて補充学習を取り入れ、効果を上げることができた。また、3学期に行った「学力考査」においては、学年全体から見た個々の学習状況の分析をし、課題のある児童への指導の方向性を指し示すことができた。今後も、より効果的な支援を進めていき、確実に基礎学力の定着を図っていけるようにする。
- ② 努力評定を取り入れた内部推薦制度を運用し、内部推薦者50名（学年全体の41%）を決定した。また、学年全体における内部推薦認定率は91%となり、課題は残るものの進路保障を概ね達成できている。さらに、本年度から「小学校でのコース内定」を実現することができた。次年度以降は、小学校での学力保障を含め、評価基準等の精査ならび児童指導規定を基にした判定基準をさらに充実させていく。また、本年度は、「月刊近小」を活用し、全学年の保護者に進路説明会を開催し、本校の進路指導について発信することができた。
- ③ 進路学習を計画以上に（進路指導部では年間5回）計7回進めることができた。今後も、卒業生による進路学習を充実させていく。

## (2) 児童アンケートの考察

児童へのアンケートとして、「ふりかえりシート」を実施したところ、この1年間、様々な活動や体験を通して「一所懸命頑張った」「頑張ってきたので、こんなことができるようになった」といった肯定的な自己評価が多く、児童が学校生活を満喫している姿が伝わってきた。また、学校行事への意見なども多く寄せられ、関心の高さ、充実感もうかがえた。少数意見であるとはいえ、否定的な意見も見られたので、しっかり受け止め、児童の確かな成長に活かせるよう、教職員一丸となって教育活動を進めていく所存である。

## (3) 保護者アンケートの考察

今回、メールでのアンケートを実施し、1年間を振り返り、子供の成長を喜んでおられる意見を多数いただいた。併せて、担任等の対応に対する労いの言葉も多くいただいた。また、本校の教育活動についてもご賛同のご意見を多数頂いた。それらの意見に甘受することなく、厳しい意見にも真摯に受け止め、来年度の教育活動に活かしていく所存である。

尚、各項目別の内容ならびに改善を図るべく方向性等については、次の通りである。

－学校方針について－

学校方針・教育方針については、従前同様、叡智教育・道徳教育・健康教育の調和のとれた教育活動の充実に努める。今後も、本校の伝統を引き継ぎながら、時代のニーズに応えられるよう教職員一丸となって取り組みを進めていく。併せて、近畿大学学園の附属校として、幼稚園・中学校・高等学校・大学との連携を一層深め、より充実した近畿大学学園ならではの教育を推進していく。

－学習指導について－

新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現するために教員の研修を進めるとともに、ICT教育機器を活用し、自ら進んで学習に取り組める学習者を目指した取り組みを進めていく。

来年度より、英語科については、ALT（ネイティブスピーカー）と日本人教師の二人体制で実施し、授業の充実に努める。併せて、体験的活動を取り入れて、実践的コミュニケーションを重視した本校独自の英語教育の確立を目指す。来年度も、4・5年生の希望者を対象とした、英国オックスフォードサマースクールを実施する。

－生活指導・安全指導について－

今年度も「あいさつ」「身だしなみ」「登下校マナー」を重点目標として、学校全体で取り組みを進めてきた。来年度も、各ご家庭のご協力を得ながら、「あいさつ」を進んでできるよう学校全体で取り組んでいく。

大阪北部地震の際には、ご心配をおかけしたが、災害時における児童の安全を確認・確保するため、来年度より、希望するご家庭には「キッズ携帯（スマホは不可）」に限り、所持を許可することとする。

－ケータリング給食について－

回数については、多くのご意見を頂戴したが、来年度も週3回のケータリング給食を、学期毎の選択制を取り入れ実施する。安全で安心して摂食できるよりよいケータリング給食となるよう、業者と協議を進めていく。今後、さらに児童が楽しみにするようなケータリング給食を目指して改善に努める。

－近小ゼミについて－

高学年では、教員が役割分担し、習熟度別のグループ編成での近小ゼミやステップUP学習を実施している。今年度より、児童個々の学力に合わせた学習を促進するため、eラーニング教材として評価の高い「すららネット」を近小ゼミに導入した。

－進路・進学について－

進路・進学についての情報の開示に努めるとともに、各学年に応じた進路説明会の実施等により、柔軟な進路選択と高い進路保障を実現するための取り組みを進めていく。併せて、附属中学校への内部進学については、得点や模試の偏差値では測れない学力や主体的に行動することができる力を持つ児童を推薦する基準に基づき、希望コースも含め内定をいただいている。今後もよりよい推薦制度を目指し、改善を進めていく。

－保教会活動について－

児童を中心に保護者、教職員が一つとなれるように、保教会行事等の精選を行い、今後ともよりよい関係の構築に努めていく。また、保教会役員・委員の負担が過剰とならないように、継続して協議を進めていく。

－学級や授業の雰囲気について－

学年主事を中心として、若手教員の指導力の向上はもとより、各教員の資質・指導力・力量等の向上に努め、学年集団の連携を深め、それぞれの学年の指導の充実に努める。また、ホームページ等を活用して、学校生活の様子をより詳細に開示していく。

#### (4) 保教会運営委員アンケートの考察

学年として連携して教育活動を展開しているが、新任とベテラン、子供に対する声かけの違い等が見られるため、学級差が生じないよう基本研修（若手教員対象の研修）等、早急に是正して欲しい。週末や長期休業中の宿題がかなり多いため、家庭での生活に負担が過剰に重いため、検討して欲しい。ケータリング給食については、週5回を含め、現状通り希望制の中で回数を増やす等改善をすすめて欲しい。音読カード、日進月歩等は素晴らしい取り組みなので、是非とも継続して取り組みを進めて欲しい。来校時の周辺駐車場への駐車、参観時のおしゃべり等、保護者の一部の方の行動や言動とはいえ、周りに迷惑をかけていることが見られる。私学に通わせる保護者として、規範意識を高く持ち、モラルを確立する必要がある。

### 4. 学校関係者評価について

#### (1) 教職員による評価の結果について

本校の教育活動について概ね高評価を得た。しかしながら、幼小一環教育の確立やプログラミング教育をはじめとした学習環境の整備や指導の改善、生活指導や児童活動については、一層の充実を図るべく、取り組みを進めていくようにとの提言を受けた。

#### (2) 児童によるアンケート結果について

肯定的な自己評価が多いことについて、高評価をいただいた。今後とも、引き続き、近小の伝統を受け継ぎながら、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼・中・高と連携しつつ、学園教育の根底部分について、質の向上を目指した取り組みを推進していくことを望むとの提言を受けた。

#### (3) 保護者によるアンケート結果について

学校に対する厳しい意見が少ないとは言え、実際にあることを踏まえ、批判に対しては、謙虚に耳を傾けると同時に、速やかに改善を図るようとの提言を受けた。

#### (4) 保教会運営委員によるアンケート結果について

多くのコメントが寄せられていることから、保教会活動が児童を中心として、保護者と教職員が一つとなって展開され、教育活動に多大に寄与していると評された。今後とも、行事

の負担軽減や精選等、保護者の負担の一層の軽減を図るべく、時代に応じた保教会活動の在り方について、支援していくようにとの提言を受けた。

## (5) 総括

以上、本年度の教育活動について概ね、了承を得ることができた。喫緊の課題である児童募集に向けて、引き続き、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼稚園との一貫教育に基づく教育活動を充実するとともに、附属中学校・高等学校、大学との連携を深めていくことで、私学としての質の高い教育を保障し、児童や保護者の信頼や期待に応えられるよう、教育改善を一層進めていくようにとの提言を受けた。

そこで、来年度は、次の8点を具体的方策として掲げ、教育活動を推進していくことを提案し、了承を得た。

- ① 「新学習指導要領」の趣旨を理解し、日々、より質の高い教育活動を展開できるように努力する。
- ② 附属中学校への推薦制度のさらなる改善を目指すとともに、確かな基礎学力定着させる方策を検討する。
- ③ 教職員個々が自らの人格の成長に務めるとともに、授業の質を向上する。
- ④ おもいやりの心を育み、正しい生活習慣を身に付けさせるとともに、友だちを大切に、協働する喜びを感じられる教育を心がける。
- ⑤ ICTを活用した教育活動を推進し、教育の多様性と効率化を追求するとともに、高度情報化社会の中に生きる児童の適応力とモラルの向上を目指した教育を行う。
- ⑥ 社会人として、自らの言動に注意し、明るく健全な職場環境の維持に努める。
- ⑦ ICTの活用や業務の見直しなどにより仕事の効率化・ペーパーレス化を図る。
- ⑧ 教職員全員の共通理解のもと、児童の募集に向けて総力をあげて取り組む。



# 近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL